

## 令和2年度「不登校に関する研修会」(第1回) 講義記録

1 日 時 令和2年7月27日(月) 10:15~12:00

2 場 所 姫路市市民会館

3 講 師 立命館大学大学院 春日井敏之教授

4 テーマ 不登校の子どもに寄り添うための保護者の役割

### 5 内 容

#### (1) コロナ感染による一斉休校と子どもの生活

- ・マスクは表情が分からなく感情が読み取りにくい。→言語の獲得など、乳幼児の発達、成長への影響も心配される。
- ・休校期間中は「学校に通う意義」についてゆっくりと考える機会となった。
- ・9月は例年以上に、特に小1や中1で不登校や登校しぶりが増加することが心配される。新しい環境に馴染みにくい子どもにかかる負荷が大きい。
- ・行事がのきなみ実施されなくなり、学習中心の学校生活では、子どもが楽しみに登校してきた学校生活とずれが生じてくる。

#### (2) 学校の役割について問い直す

- ・指導、支援、ケアの場であり、協同の学びと生活の場である。双方向の関係のなかで、子どもも教師も変化、成長していく場である。
- ・指導と支援は子どもの「いのちと権利と利益」を守ることが、その正当性の根拠となる。これを「いのちと権利と利益」のための「守りの枠」と考えている。
- ・支援とは、個に応じた最適な「守りの枠」について一緒に考えるプロセスである。「おずおずと背中に手を当て、気持ちを押し量りながらそっと背中を押す」といったイメージである。
- ・ケアとは、福祉的な環境調整を軸にしながら、深い傷付きを負ったその人の存在、いのちをまるごと受け止めていくことである。それは、一緒に居ることから始まるのではないか。
- ・子どもの生活や感情、願いなどを丁寧に聴き取ること、見取ることが大切である。また、わからないことは、周辺の子どもの尋ねることも大切である。
- ・コロナ感染の状況だからできることを子どもと一緒に考えること。子ども同士の関わり合いが増える活動や体験の積み重ねが重要である。

(3) 子どもの言動をキャッチするセンサー

- ・子どもは、親に似た強み（ストレングス）を持っている。子どもへの減点評価ではなく、強みを肯定することから親との関わりを始めることは大切である。
- ・子どものトラブルは、双方の成長のチャンスである。排除の論理はやめること。
- ・子どもの気になる言動は、大人への子どもからの SOS。大人のセンサー、感性が問われている。重要なことは個人の力量頼みではなく、チームとして複数の視点を持つようにすることである。

(4) 子どもは大人・社会を映す鏡

- ・多様な子どもが存在する学校教育の場に、ゼロトレランス（アメリカ発祥の商品管理の考え方）を持ち込むことはふさわしくない。子どもは企画商品ではない。大人も余裕を失い、同僚や子どもの失敗に対して不寛容、排他的になってないか。
- ・短期、中期、長期の視点で子どもの成長をじっくり見守るようにする。  
目先のことにこだわる大人の熱意が、子どもをまた「コントロール」することにつながってしまう。
- ・子どもの第二の誕生を大切にすること。  
第二の誕生とは、思春期に子どもが社会とつながり、自分と向き合いながら、自分の人生の主人公になっていく入り口である。

(5) 「自己決定」+応援付きの意味

- ・子どもの自己形成にとって、「自己決定」+応援付きが重要。「自己決定」+自己責任論では、子どもは分断され孤立してしまう。
- ・応援には二つの意味がある。一つには、自己決定までのプロセスを応援すること。二つには、自己決定の成否にかかわらず応援し続けることである。
- ・ほめること、叱ることの重要性が指摘されるが、評価であることを忘れない。  
ほめることが子どもへのプレッシャーに、叱ることが大人不信につながることもある。

(6) コミュニケーション力について

- ・子どもの語る力の弱さの背景には、大人の聴く力の弱さがある。
- ・双方向のコミュニケーション力が大切であり、大人が子どもに対して統制的・抑制的ではなく、対話的・共感的な関係、姿勢で関わるのが重要である。
- ・具体的には、「問う」「聴く」「語る」という関わりを大切にしていくこと。

(7) 思春期の子どもとの関わり方

- ・子どもたちの承認欲求：認めることには2つの意味がある。  
「能力レベルで認める（ほめる、頼る、励ます）」と「存在レベルで認める（ねぎらう、赦す、守る）」の2つである。
- ・子どもの気持ちを聴き取るキーワード：「どうしたん？⇒どうしたいん？⇒それでいいんちゃう」
- ・解決請け負い人ではなく、共に悩み一緒に考える存在に。
- ・プロセス評価の意味：結果にこだわりつつ、出た結果にこだわらないこと。
- ・「チーム学校」には、教職員だけではなく子どももパートナーとして含まれる。

(8) つながって生きる力を育む

- ・生きる力：孤立して生きるのか、つながって生きるのか。
- ・変化する社会に適応していくことだけではなく、社会をよりよく変革していく主体になっていくこと。地域・社会、人類の課題解決を図るためにどうしたらいいのか、できることを一緒に考えていくこと。
- ・つながりの実感は、生きがい、やりがい、自己肯定感を育んでいく。
- ・具体的には、①誰かを助ける、②誰かに助けてもらう、③誰かと一緒にやりたいことと楽しいことを目いっぱいするなかで、人は人とお互いにつながっていく。

(9) 子ども心に寄り添うということ

- ・子ども心に寄り添うとは、「子どもの生活、感情、願いをまるごと受けとめようとする姿勢」。
- ・「あなたはどうしたいの？」「お母さんにはどうしてほしいの？」「お父さんにはどうしてほしいの？」「担任の私にできることは何かある？」といった問いを大切にしていくこと。
- ・支援で大切なことは、「その子どもが今一番大切にしていることを認め、尊重していくこと」である。そこから自前のエンジンにスイッチが入ることも多い。

(10) キャリア教育について

- ・進路指導は進学指導に、キャリア教育は就職指導に矮小化されていないか。キャリア教育は、「生き方を考え合う教育」。
- ・答えが一つではない本質的、哲学的な問いから、生き方に関わる対話は深まる。
  - ① 「10年後、あなたはどんな人間になっていたいですか」⇒「その人間がどんな仕事ができそうですか」⇒学びを重ねることは選択の幅が広がること。
  - ② 「あなたは何のために生きているんですか」
  - ③ 「あなたは今何を一番大切にしているんですか、その理由は」